

戸出古戸出遺跡調査概報Ⅱ

— 平成15年度宮島市営住宅建替事業に伴う発掘調査 —

2004年3月

高岡市教育委員会

序

高岡市戸出地区は、藩政期においては加賀百万石を支えた砺波平野の一角に位置しており、現在に至るまでに散居村といった北陸有数の田園空間を形成してきました。このような、農村景観は古く奈良時代にはみられたものです。

万葉の歌人大伴家持は、越中国守として高岡伏木地区に赴任しましたが、その職務のうちで最も重要な課題は荘園の管理でした。その名残は、奈良正倉院宝物として「越中国杵名姪村開田図」などが残されております。近年では、当地区周辺に「杵名姪村」があったのではないかとされる意見も発表されてきておりますが、今回の調査は平成11年度に引き続き東大寺領荘園などの周辺地域像が明らかにされていく道筋を少なからず示す成果を挙げることでできたといえましょう。

最後になりましたが、調査成果が多くの方々に活用され、さらには地域の歴史及び文化理解の一助となれば幸いです。また、調査実施にあたりまして多大な御協力をいただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、高岡市による市営宮島住宅建築工事に先立つ発掘調査結果である。
3. 当調査は、高岡市建築住宅課の委託を受けて、高岡市教育委員会の監理指導の下、北陸航測株式会社が実施した。
4. 調査地区は、高岡市戸山5丁目地内に所在する。
5. 現地調査は試掘を含め、平成15年5月28日から同年11月20日までの期間に行った。
6. 発掘調査にかかる関係者は次の通りである。

高岡市教育委員会文化財課

課 長 大石 茂

副主幹 木林 弘吉

課 員 根津明義 荒井 隆 太田浩司

北陸航測株式会社

課 長 宮森俊英

調査員 占田 寿

7. 本書は、高岡市教育委員会文化財課太田浩司文化財保護主事の監理のもと、主に北陸航測(株) 主任調査員吉田寿が執筆・編集を行った。
8. 発掘調査及び整理作業にあたり下記の諸氏、諸機関にご教示とご協力を賜りました。(敬称略)
根津明義 丸二開発工機(株) (株)ヨシカワ (財)高岡シルバー人材センター
9. 自然科学分析については、太田がサンプリングし、放射性炭素年代測定について(株)加速器分析研究所に委託した。年代較正は、太田が実施した。
10. 遺跡略号の表記については「TF2」を設定し、出土遺物単位毎に遺物番号(R番号)を付した。
11. 本書の挿図・写真の表示は次のとおりである。

(1) 平成14年4月1日から施行された測量法により、日本測地系が世界測地系に変更されたが、本書では旧座標(V系)を主として使用し、新座標(世界測地系)を第3・4図に併記した。

(2) 遺構の表記は、竪穴住居：Sf、掘立柱建物：SB、溝：SD、土坑：SK、ピット：P、性格不明遺構：SXを用いた。

(3) 本書における遺物番号次の通りである。須恵器：101～ 上師器：201～ 青磁・珠洲：301～

(4) 出土品及び図面・写真類は、高岡市教育委員会が保管している。

12. 発掘調査及び整理作業参加者は下記の通りである。(敬称略)

金森栄治 高岡信一 福本 繁 南 弘喜 山崎勝二 山田二郎(以上、(財)高岡シルバー人材センター)

池田昌美 上野由美子 中田郁子 藤井美紀 辺城義一 森田成美 守田 睦 山崎喜笑男

米倉和子

凡 例

1. 本書で使用した地形図は、第1図が高岡市都市計画図1万の1「高岡」、第2図が2千5百分の1の『高岡市基本図』を調整して用いた。
2. 挿図中の方位は座標北を示す。
3. 土層説明及び遺物観察表の色調の記載は、2002年度農林水産省農林水産技術会事務局監修の『新版標準土色帖』に拠る。
4. 本書の挿図縮尺は下記の通りとし、スケールを図中に示した。
遺跡位置図 1/10000・1/2500
調査区全体図 1/350
調査区平面図(割図) 1/80
遺構実測図 1/60 竪 1/30
遺物実測図 1/3
5. 本書の遺物写真縮尺は概ね挿図の縮尺に準じた。
6. 遺構番号は、原則として現地調査時に付した番号(遺跡・遺構毎の連番)を本書においても踏襲した。
7. 遺構図断面図中で使用したスクリーントーンは地山を表している。
8. 遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器、白抜きは土師器、スクリーントーンは青磁・珠洲を示す。

総 目 次

序 文

例 言

凡 例

総 目 次 / 挿図目次 / 図版目次

第I章 遺跡の位置と環境	1
第II章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査区概観	3
第3節 試掘調査の概要	3
第III章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺構	6
第2節 遺物	24
第VII章 自然科学分析	28

報 告 書 抄 録

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/10000)	1	第12図 調査区平面図 (割図8)	15
第2図 遺跡位置図 (1/2500)	2	第13図 調査区平面図 (割図9)	16
第3図 試掘トレンチ配置図	4	第14図 調査区平面図 (割図10)	17
第4図 調査区全体図	7	第15図 S I 01実測図	18
第5図 調査区平面図 (割図1)	8	第16図 S I 02・03・S X 01実測図	19
第6図 調査区平面図 (割図2)	9	第17図 S B 01実測図	20
第7図 調査区平面図 (割図3)	10	第18図 S B 02・03実測図	21
第8図 調査区平面図 (割図4)	11	第19図 遺物実測図	25
第9図 調査区平面図 (割図5)	12	第20図 遺物実測図	26
第10図 調査区平面図 (割図6)	13	第21図 遺物実測図	27
第11図 調査区平面図 (割図7)	14		

図版目次

図版1 調査前近景 (東から)	垂機掘削
図版2 調査区全景 (垂直写真)	調査区遠景 (南から)
図版3 S I 01検出状況 (北東から)	S I 01遺物出土状況 (北東から)
図版4 S I 01完掘状況 (北東から)	S I 02検出状況 (西から)
図版5 S I 02遺物出土状況 (西から)	S I 02完掘状況 (西から)
図版6 S I 02縦セクション (北から)	S I 03検出状況 (北西から)
図版7 S I 03遺物出土状況 (南東から)	S I 03完掘状況 (北西から)
図版8 S B 01 (西から)	S B 02 (西から)
図版9 S B 03 (南から)	S D 01検出状況 (東から)
図版10 S D 01 (東から)	S D 02 (北から)
図版11 S D 03 (東から)	S D 05 (北から)
図版12 S D 06 (北東から)	S D 07 (北東から)
図版13 S D 08 (北から)	S D 09 (北東から)
図版14 S D 01・02切り合い状況 (南西から)	S D 09遺物出土状況 (北東から)
図版15 試掘トレンチ (北から)	作業風景
図版16 遺物	
図版17 遺物	

第I章 遺跡の位置と環境

富山県西部を流れる大河庄川は、太古より幾度かの氾濫を重ね、地形を刻んで今日に至っている。現在では、千保川筋、祖父川筋、荒又筋といった島状の微高地がその扇状地上に形成されている。本遺跡はそれらの中で祖父川筋上にある。

本遺跡は高岡市南部戸出地区に位置し、東方約800mには国道156号線が南北に縦走する。地形的には、庄川流域に形成された扇状地の扇端部にあたり、標高約29m前後に立地している。また近世以降に形成された戸出市街地は扇端部の下段に位置し、当地の北東方にその広がりをみせている。

戸出地区においては歴史時代を主として包蔵地が周知されている地域ではあったが、発掘調査による実態の解明はほとんどなされておらず、未明な部分の多い地域である。しかし、近年の開発に伴う発掘調査によりその歴史が徐々にではあるが明らかになりつつあると言え、平成11年度に隣接地で行われた調査では、古代の集落の一部の存在が明らかにされている。

また近年では、当戸出地区（戸出市野瀬周辺）にはいわゆる古代越中国における東大寺領荘園のひとつ「杵名姪村」が存在していたと考える学説がみられる。だが、現時点では、そのことを積極的に裏づける考古資料はいまだ得られていない。

平成11年度における隣接の調査、さらには今回の調査により杵名姪村周辺の状況が着実に判明してきている。



※黒塗り部分は平成11年度調査区

0 100 500 1000m

第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査については、平成14年度に高岡市建築住宅課による富島市営住宅の建築工事が計画されたことに伴い、当該地区にかかる埋蔵文化財の取扱についての照会が高岡市教育委員会に寄せられてきたことに端を発するものである。

しかし、当該地区は平成11年度に実施された高岡地区豊戸28号線地区に隣接しており、事前に発掘調査を実施する必要性が生じた。これを受け、高岡市建築住宅課と高岡市教育委員会との間で協議の場もたれ、平成15年6月から試掘調査を実施することで合意に至った。試掘調査は、北陸航測株式会社において実施された。

試掘調査の結果、各トレンチから遺構や遺物が検出されたことから、富山県発掘調査等対応基準に照らし、住宅建築箇所はもとより、遺構が削平される箇所、遺構が検出された部分を中心に本調査を実施する必要があるものと判断された。この結果をふまえ、平成15年6月22日から本発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査区概観

本遺跡は川川扇状地の扇端部に立地するいくつかの微高地のうち、祖父川筋に形成されたもので、現地表面は標高28.6～29.0mを測る。層序の観察によれば、数カ所の攪乱が遺構確認面よりも深く達している部分も認められたが、全体的に見れば、遺構確認面の遺存状態は良好と言えよう。

一方、地形は周囲に広がる水田地帯を詳細に観ると、周辺のそれらに比して高い位置にあることがみてとれる。このことは、調査区一帯が島状の微高地上に位置することを示唆するもので、集落を形成しやすい条件が整っていたものと言える。

第3節 試掘調査の概要

調査経過

調査区域の設定は、工事対象区域全体の状態が把握できるように、南北の試掘坑（トレンチ）を無作為に5列設定した。また、遺構検出が想定された箇所においては、随時拡張を行い掘削の範囲を設けた。

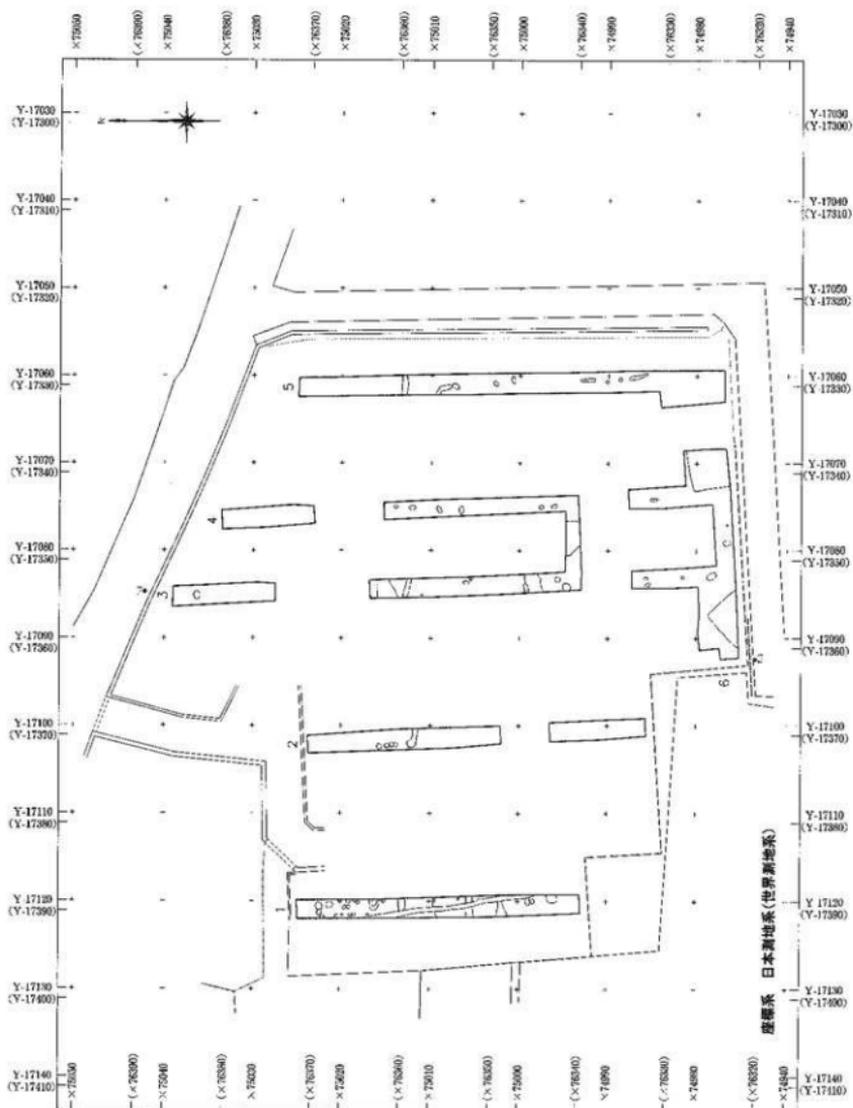
調査は5月28日より開始し、まずバックホーにより表土及び客土の除去を行い遺構確認までの掘削を行い、その後人力による精査によって遺構の検出をした。重機稼働日数は4日、遺構検出作業日数は6日を要した。試掘調査の面積は537㎡である。

調査の結果、遺構として堅穴住居跡と思われるものが3基、溝と思われるもの9条、土坑と思われるもの約10基、ピットと考えられるもの約30基、その他形状の定かでないもの10基以上が確認された。また遺物は、包含層中より上師器片（鬘）、須恵器片（杯蓋）等古代の土器が出土した。

この他、国家座標に則ったグリッド杭の打設、標高の取り付けを行い、その後検出された遺構のプラン実測を光波測距儀等を用いて適宜行った。また、試掘調査区全域と検出遺構プランを写真に記録するため、6月10日に実機ヘリによる空撮を行い、試掘調査を終了した。

遺跡の層序

ここでは調査区の断面観察により、表土以下、遺構確認面までの概ね3層を基本層序とした。



第3図 貫探トレンチ配置図

第Ⅰ層：(2.5Y4/2) 暗灰黄色砂質土 表土。

第Ⅱ層：(2.5Y3/1~2) 黒褐色砂質土 遺物包含層。

(遺構確認面)

第Ⅲ層：(2.5Y5/4) 黄褐色砂質土 古代地表面。

第Ⅳ層：大小の川原石で構成される礫層である。

試掘調査所見

当調査区は、平成11年度に実施された農道拡幅改良工事に先立つ発掘調査箇所に北接しており、集落等の存在が想定された。今回実施した調査では、敷地南部に竪穴住居址と思われる遺構が3箇所確認され、その他、溝・土坑・穴等多数の遺構プランが検出された。これらの遺構は覆土の状況や遺物の形態等からみて、ほぼ8~9世紀代のものと考えられる。

以上、試掘調査の結果、敷地内には集落等が展開していると思われ、かつ建物構造等の諸条件から鑑みて、富山県発掘調査等対応基準により、本発掘調査が必要であると判断され、協議のうえ高岡市文化財課が本発掘調査の必要性を判断した。

(註1) 高岡市教育委員会(2000)『戸出古戸出遺跡調査概報』高岡市埋蔵文化財調査概報第46冊

第3節 調査の経過

調査区域は、試掘調査によって得られた成果に基づき、住宅建設予定地の他、竪穴住居等、遺構が集中すると思われる部分を選び出し本発掘調査区域とした。本発掘調査の面積は1,085㎡である。

本調査は7月22日より開始し、主な経過は以下の通りである。

- 平成15年7月18日(金) 本発掘調査区域設定
- 7月22日(火) 重機による表土掘削開始
- 7月24日(木) グリッド杭打設・標高取り付け
- 7月28日(月) 遺構検出作業開始
- 8月5日(火) 遺構平面プラン空撮(実機ヘリ)
- 8月13日(水) 遺構単体プラン撮影開始(ローリングタワー)
- 8月25日(月) 遺構掘削調査開始
- 9月1日(月) 記録作成開始
- 10月30日(木) 調査区完掘状態空撮(実機ヘリ)
- 11月6日(木) 補足測量・現場確認
- 11月20日(木) 重機による調査区の埋戻し 発掘調査終了

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 遺構

本調査によって検出された遺構は、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝状遺構、柵址、土坑の他に多数のピット等である。

竪穴住居は3棟(SI01～03)確認された。SI01は南側半分が調査区外にあるが、これは以前に調査が行われており、今回の調査でその規模の全容が明らかになった。規模は図上復元によると、規模は7.2×5.4mを測り平面形は長方形を呈すると思われる。SI02は調査区南東隅より検出された。平面形は一辺5m前後の方形を呈するものと思われるが、東と南辺が調査区外となるため全容は明らかではない。遺構内には竈の痕跡が認められ、南東隅に設けられていたと思われる。SI03はC-6グリッドより検出された。規模は3.5×3.3mを計り平面形は隅丸方形を呈する。その他、C6グリッド南東にはSX01があるが、大部分が調査区外となり不明確だが、その形態や遺物の出土状況からみて竪穴住居の遺構である可能性も否定できない。

掘立柱建物址は3棟(SB01～03)検出された。SB01はC-6グリッドに位置し、桁行3間×梁行2間の側柱建物と思われる。SB02はC-5グリッドに位置し、桁行2間×梁行2間の総柱建物と思われる。SB03はB-5グリッドに位置し、SI03と切り合っている。南側が調査区外にかかるが、桁行3間以上×梁行2間の総柱建物かと思われる。

溝は10条(SD01～10)が確認された。この中で、SD01・03・04の3条は東西に延び、ほぼ同一の規格性を持つ区画溝と思われる。これに対し南北に延びるSD02とSD05は前の3条と切り合いを見せ、時期的消長関係はSD05→SD01・03・04→SD02となる。

その他の検出遺構としては、上坑4基(SK01～04)の他にピット180基(P1～180)があるが、これらの中には掘立柱建物址や柵址(SA01～03)に含まれるものもある。

1 竪穴住居址

S I 01 (第15図)

本址は調査区ほぼ中央南端のA-5グリッドより検出された。前述の隣接通路の調査により検出されたものの北側部分である。遺構の全容は南側が調査区外となり不明だが、北西辺の現存長が5.4m、北東辺が4.7mを測る。南側の資料と合成した図上復元によると、規模は7.2×5.4mという数値が得られ、よって面積は38.88㎡以上と推定され、平面形は長方形を呈するものと思われる。床面は水平を保ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、また支柱は4本となるようである。主軸方向はほぼN-47°-Eである。床面はほぼ水平を保ち、貼り床を成す硬化面が確認されている。本址からの出土遺物は須恵器片11点(蓋2 杯8 壺1)、土師器片29点(杯1 甕26 赤彩杯1 内黒杯1)である(図105・109・110・202・211・213)。

S I 02 (第16図)

本址は調査区南東端のA-6、7グリッドより検出された。遺構の全容は南側が調査区外、東側が視乱にかかり、やや不明ながらも遺構の大半は確認された。現存長による規模は北辺4.8m、西辺が3.8mを測り、平面形は方形を呈すると思われる。壁床面は水平を保ち、面はほぼ垂直に立ち上がる。面積は18.24㎡以上と推定される。南東隅には造り付け竈を有し、支柱穴は4本と思われる。周溝、貼り床等は確認できなかった。主軸方向はほぼN-10°-Eである。本址からの出土遺物は須恵器片3点(蓋2 杯1)、土師器片42

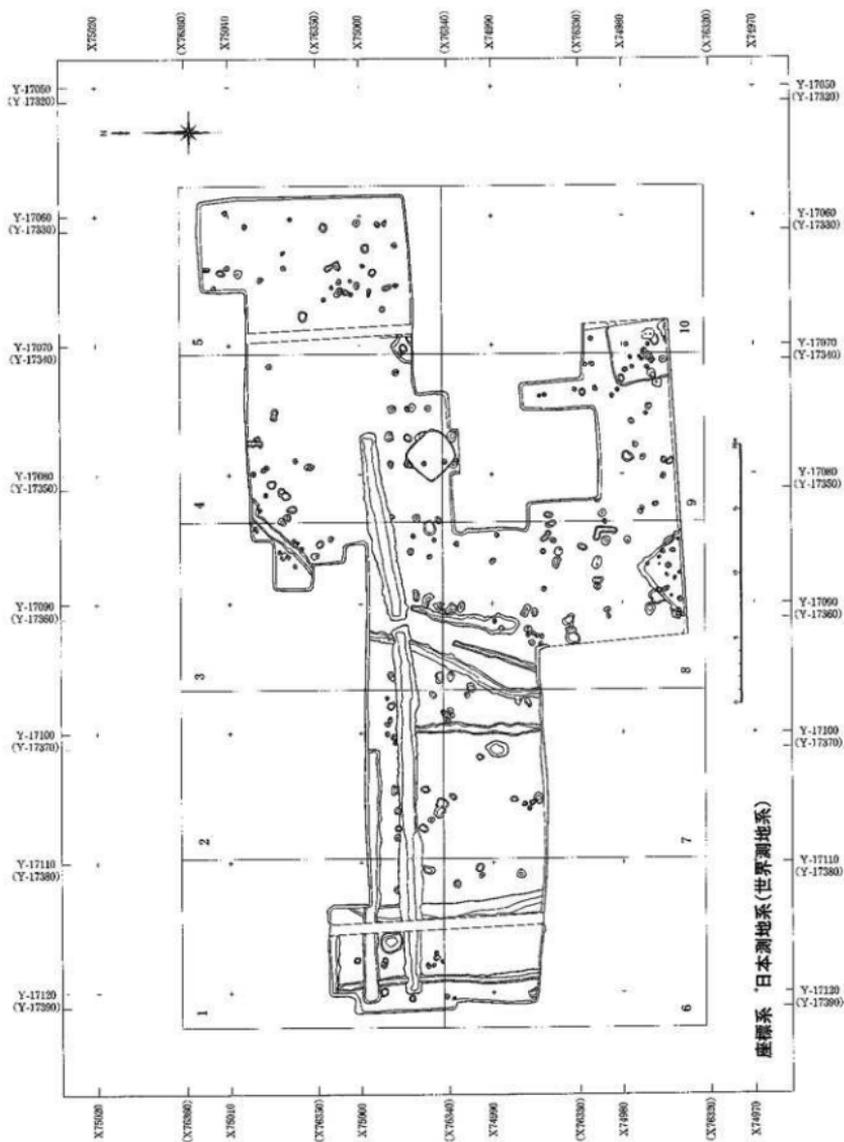
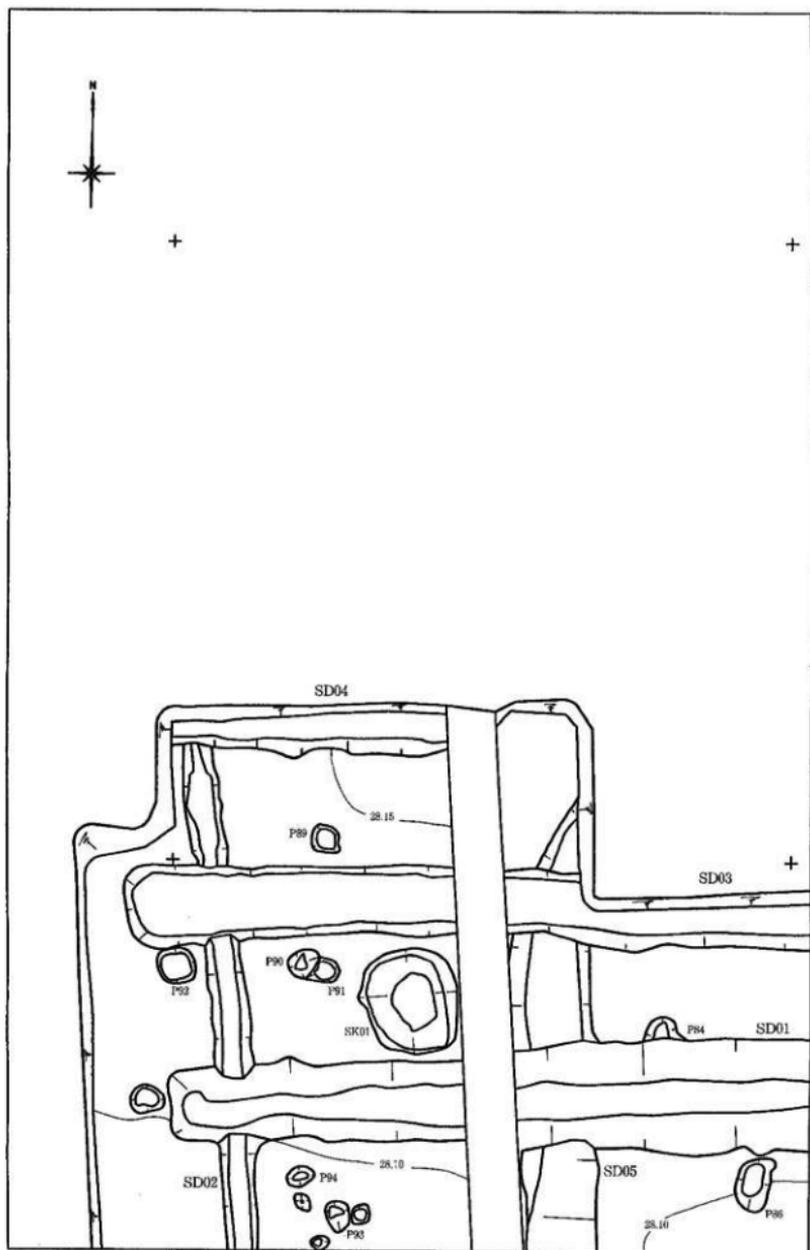
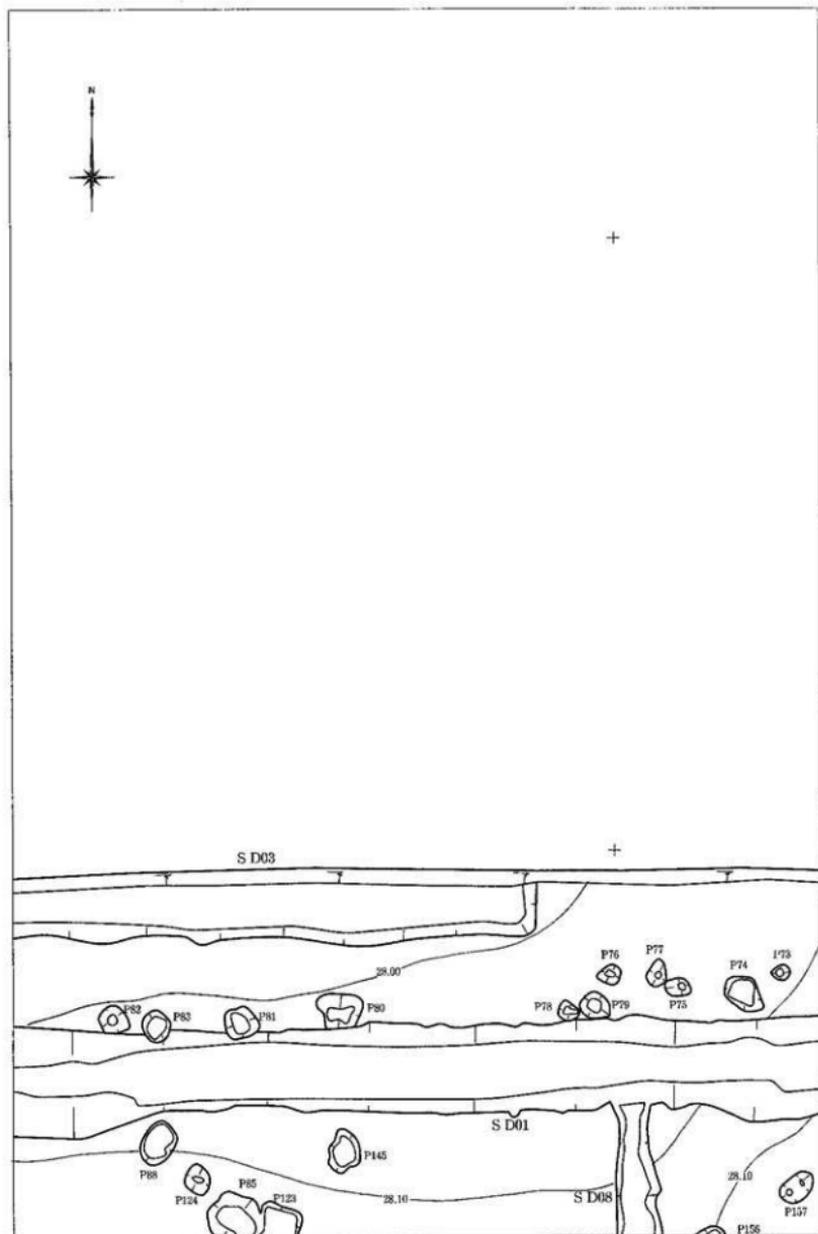


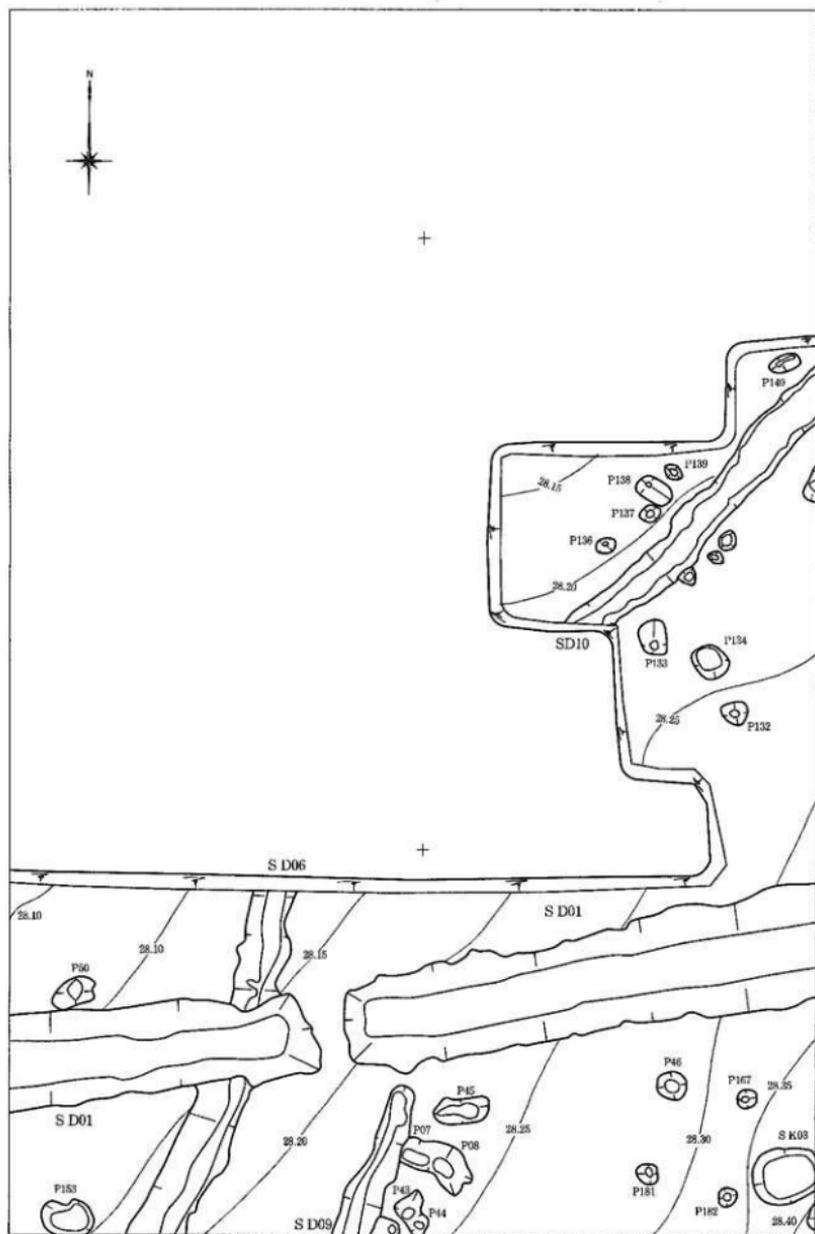
圖 4 盛縣系 日本測地系(世界測地系)



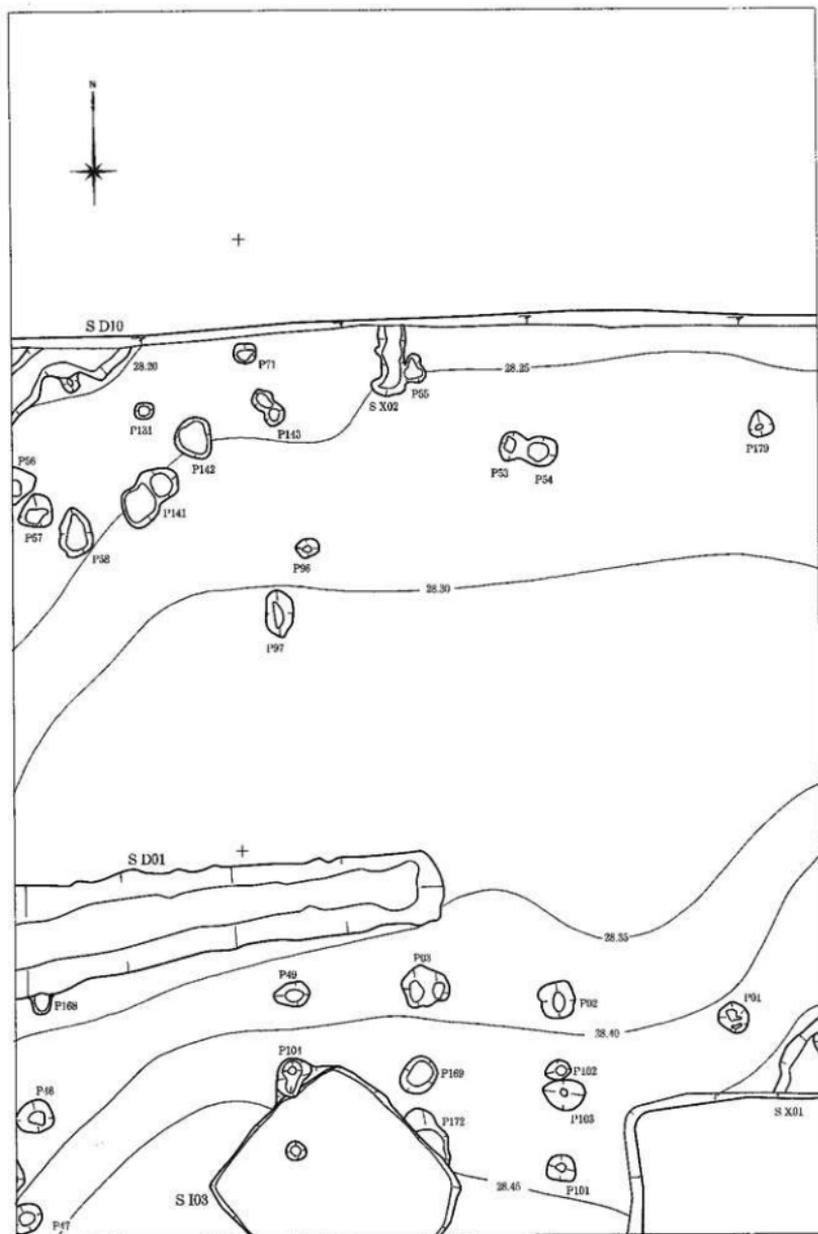
第5図 調査区平面図(割図1)



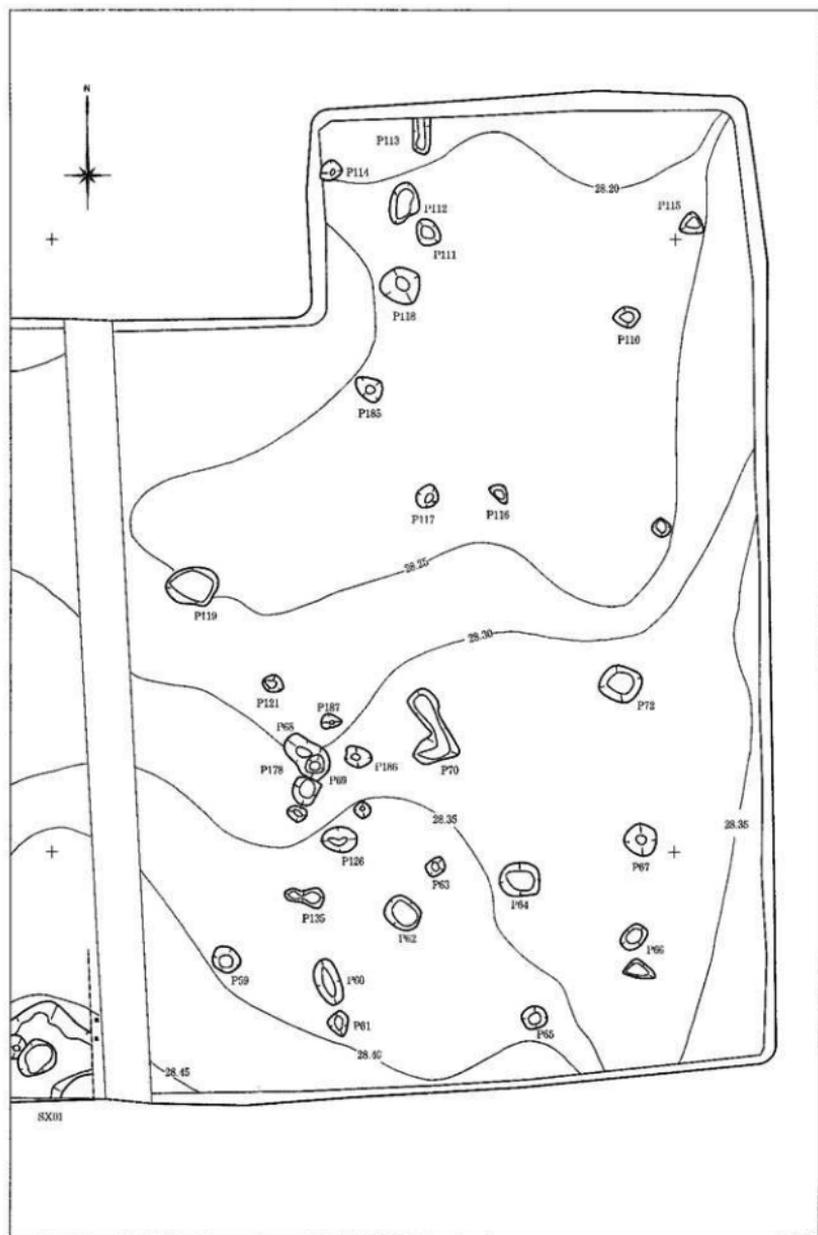
第 6 图 調査区平面図 (剖面2)



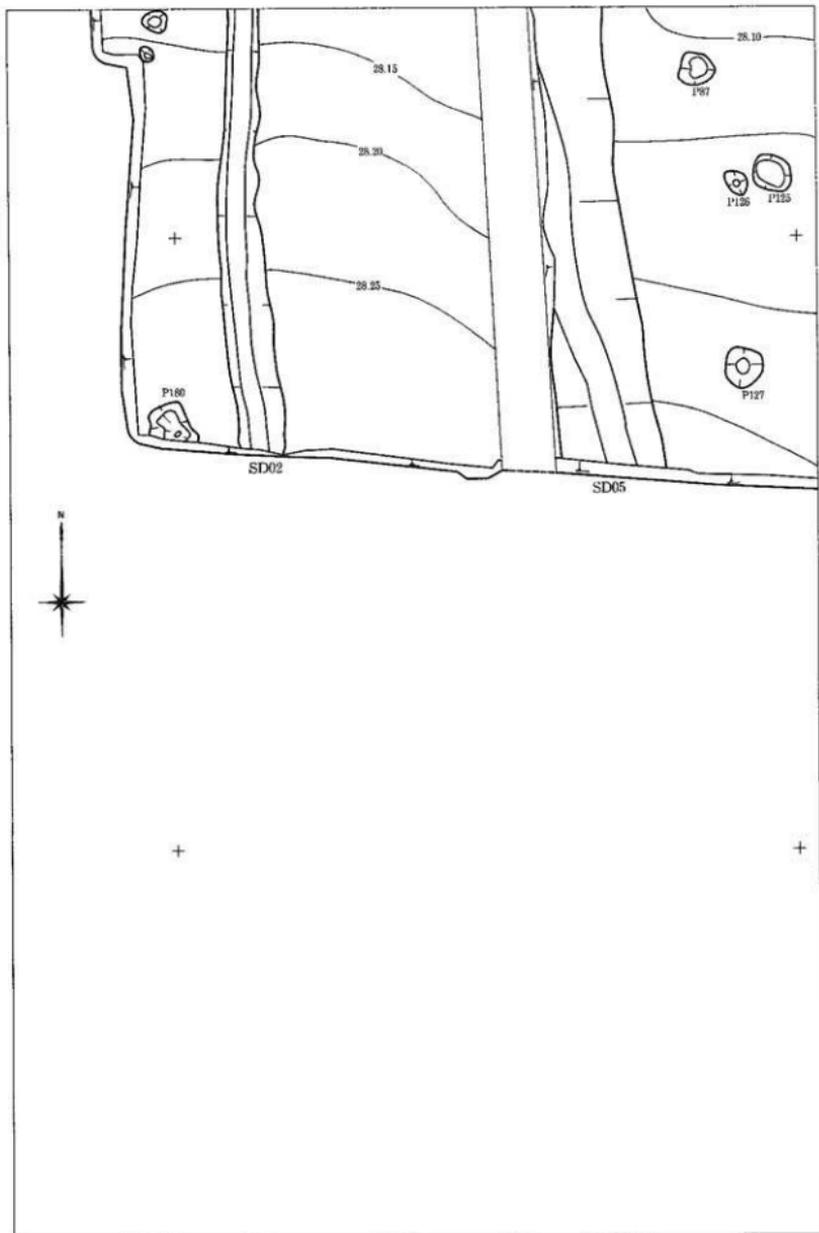
第7图 調査区平面図(割図3)



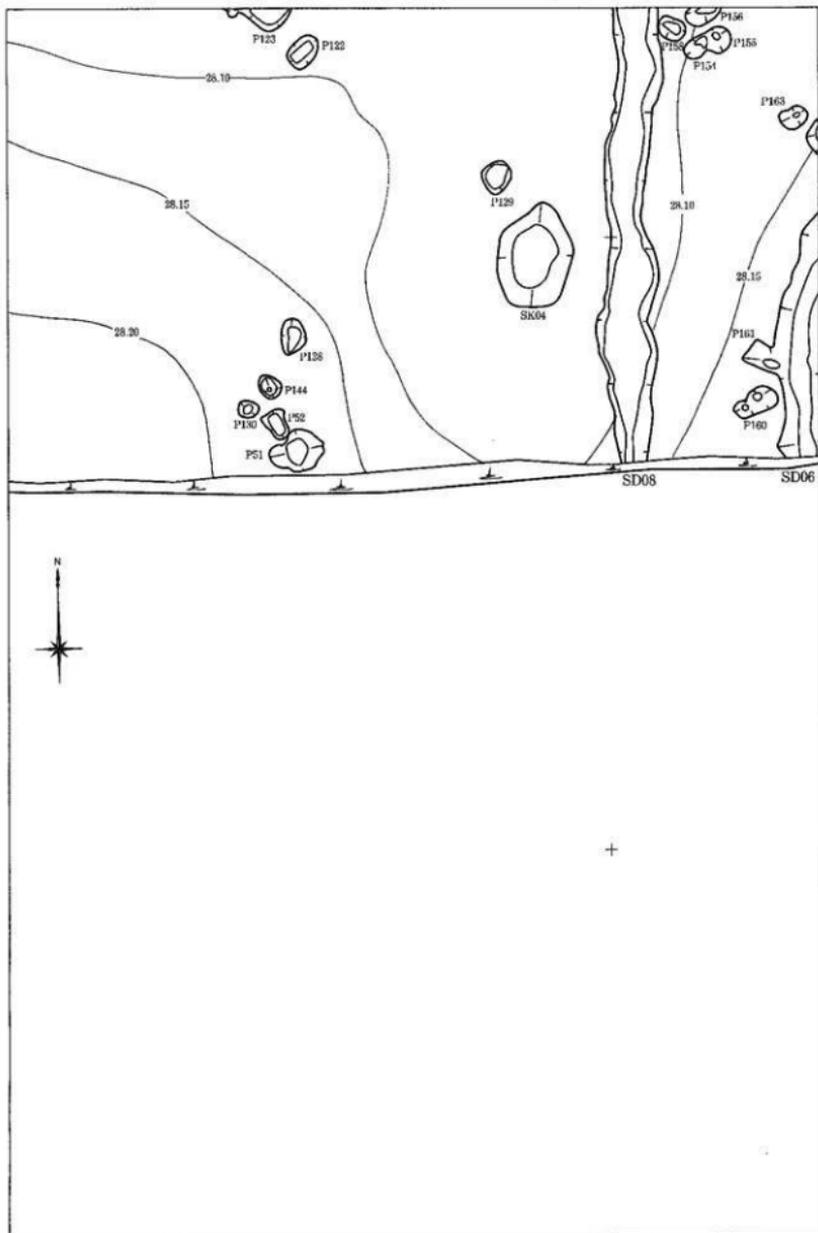
第 8 图 調查区平面图 (剖面4)



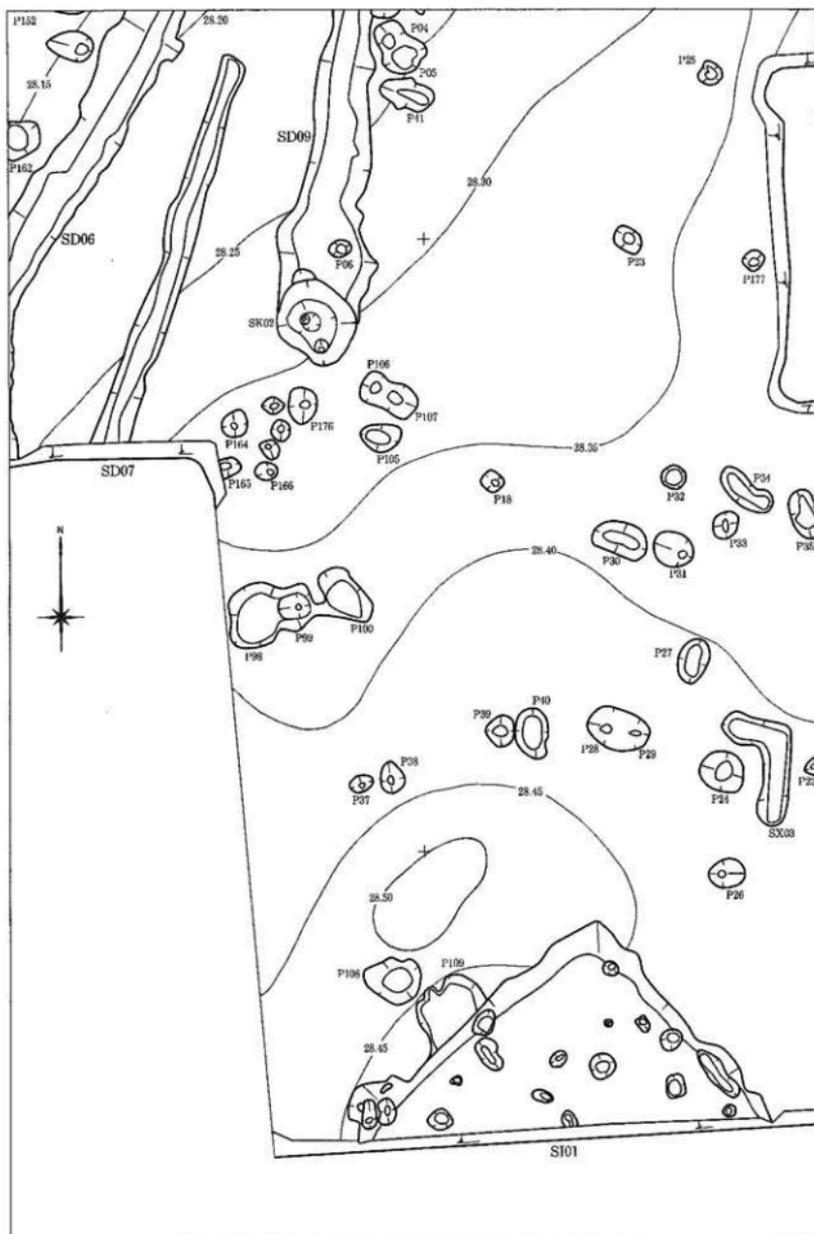
第9图 调查区平面图 (剖面5)



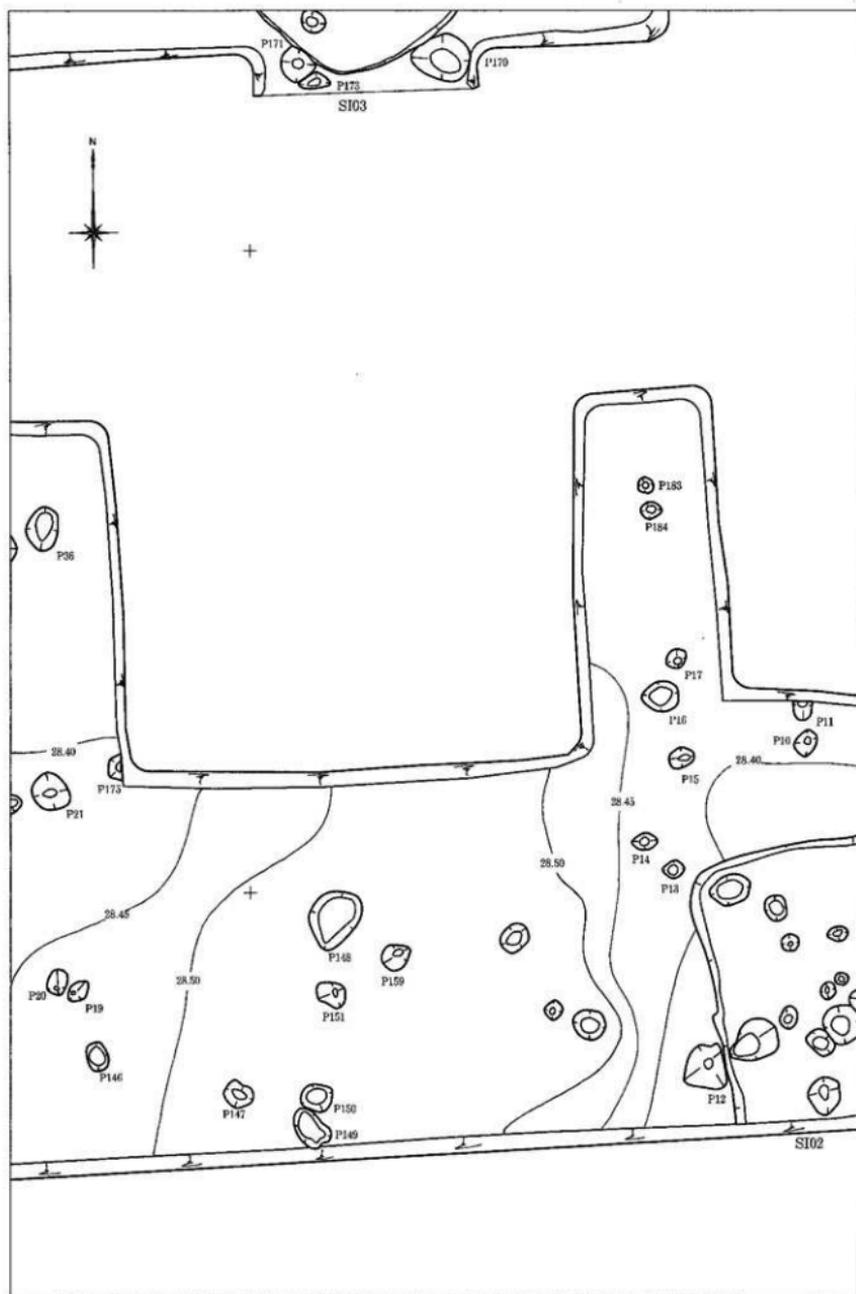
第10图 調査区平面图 (割図6)



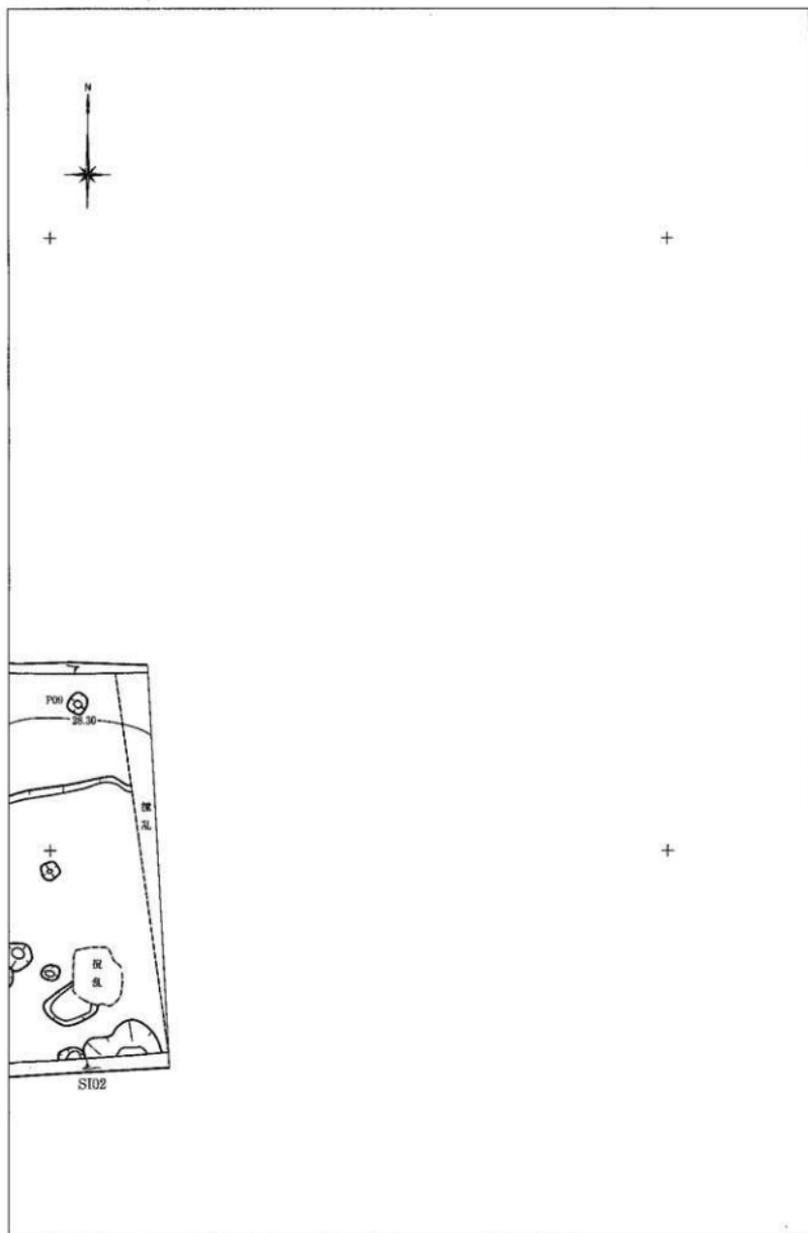
第11图 调查区平面图(割图7)



第12図 調査区平面図(剖面8)



第13图 调查区平面图(剖面9)



第14図 調査区平面図 (割図10)

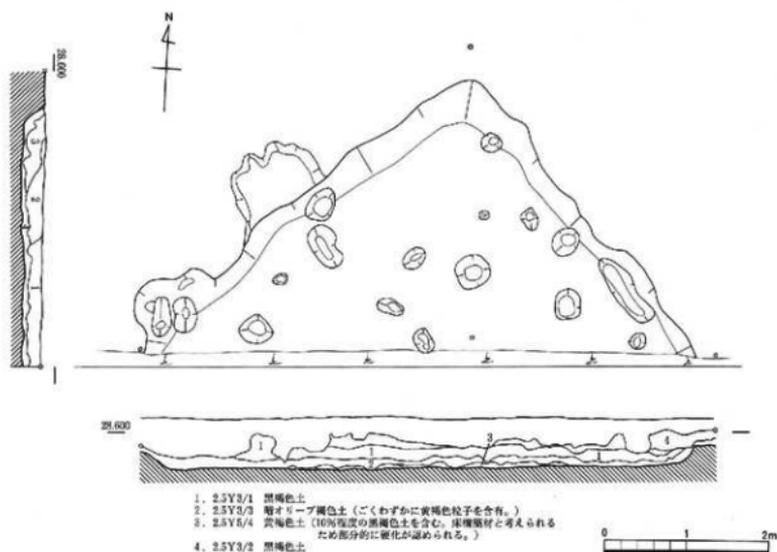
点(號41 鉢1)である(図102・106・115・201・208・215)。

S103 (第16図)

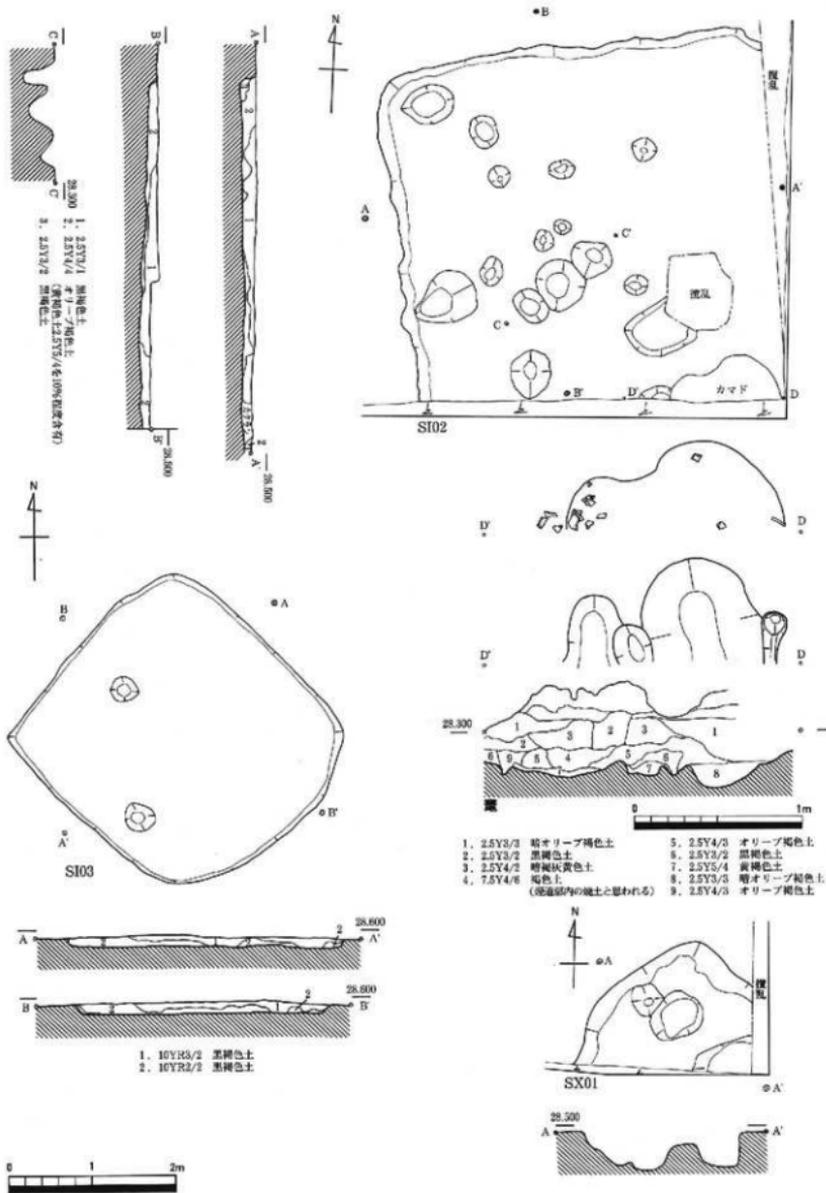
本址は調査区南東端のC-6グリッドに位置し、SB01と切り合っており、切り合い関係よりS103が古いことが確認できる。規模は北東辺3.5m、北西辺が3.3mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。床面は水平を保ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。面積は約11.55㎡である。一部、貼り床と思われる硬化面があったが、周溝や竈は検出されなかった。柱穴としては位置が不規則だが2基確認された。主軸方向はほぼN-49°-Wである。本址からの出土遺物は、甕及び土師器鍋片41点があり(図210・212・218・501)、そのうち一片の外面に付着した炭化物を年代測定のための試料としている(第IV章、図207)。なお、このほかに用途不明の金属製品一片も出土している(図501)。

SX01 (第16図)

本址は調査区南東端のC-6、7グリッドより検出された。遺構の大半部分が調査区外にかかるため、ここでは便宜上は性格不明遺構として扱っているが、本来は竪穴住居状遺構とも考えられる。東側が攪乱にかけ、やや不明ながらも遺構の大半は確認された。現存長による規模は北西辺2.1m、北東辺が1.2mを測り、平面形は方形を呈すると思われる。底面は水平を保ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。主軸方向はほぼN-45°-Eと思われる。本址からの出土遺物は須恵器杯片1点、土師器残片4点である(図120・214)。



第15図 S101実測図



第16図 SI02・03、SX01実測図

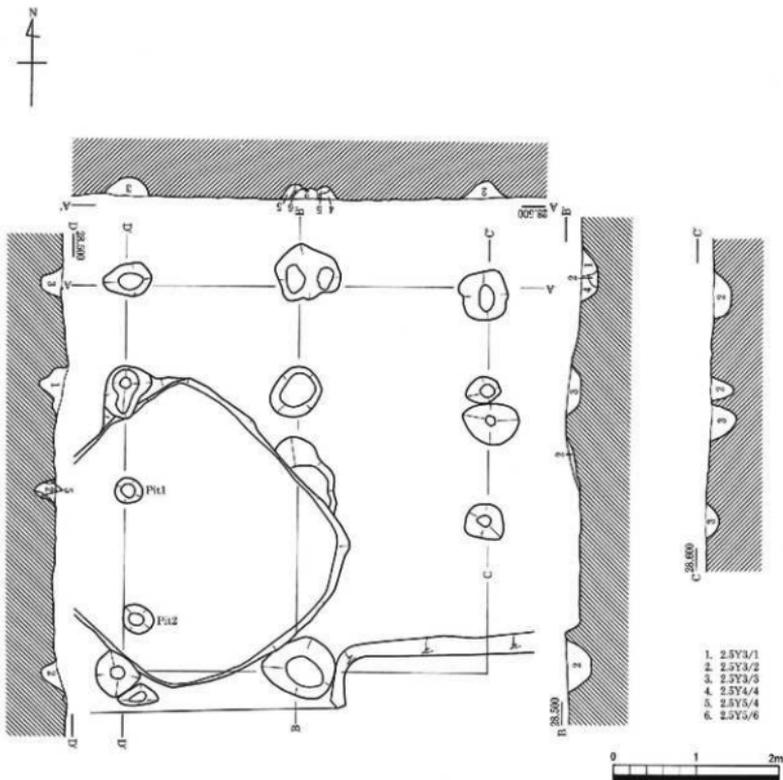
2 掘立柱建物址

SB01 (第17図)

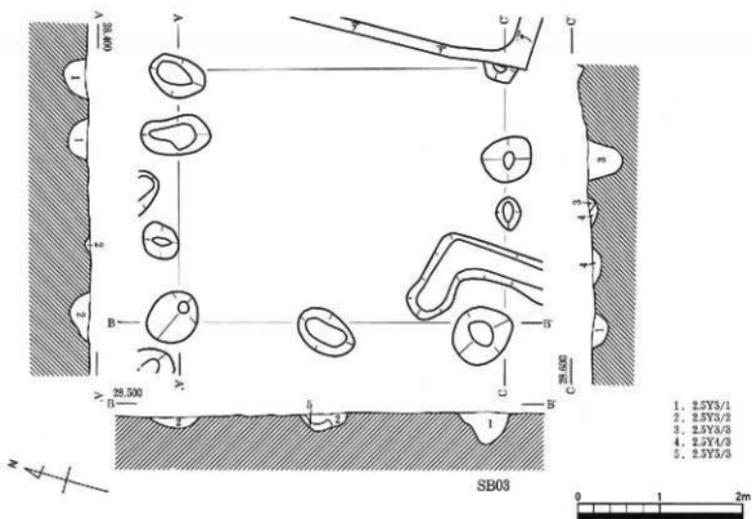
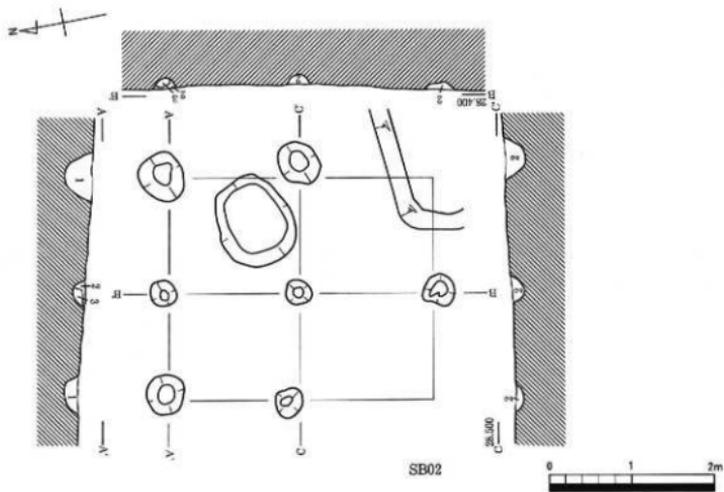
本址は調査区ほぼ中央のC-6グリッドに位置する。遺構の全容は南側が調査区外にかかる。また図中に示すPit1・2は配列や形状より竪穴住居S103のものと考えられる。桁行3間(4.8m)×梁行2間(4.3m)以上と思われ、面積は20.6㎡以上と推定される。主軸方向は座標北を示している。本址からの出土遺物はない。

SB02 (第18図)

本址は調査区東端C-5グリッドより検出された。遺構の一部は調査区外となっているため、桁行2間(3.4m)、梁行2間(2.8m)の確認状況である。主軸方向はほぼN-8°-Eと思われる。本址からの出土遺物は須恵器杯片1点、土師器髹片3点である。



第17図 SB01実測図



第18图 SB02・03实测图

SB03 (第18図)

本址は調査区東端B-5グリッドより検出された。遺構の全容は一部、東側に伸びる可能性もありやや不明だが、桁行2間(4.2m)、梁行2間(3.0m)の確認状況である。主軸方向はほぼN-8°-Wと思われる。本址からの出土遺物は土師器甕片3点である。

3 溝状遺構

SD01 (第5~8図)

本址はC-1~6グリッドにかけて検出された東西にはしる溝である。主軸方向はほぼN-88°-Eを示し、全長は44mを測る。幅は最大で198cm、深さは60cmを測る。直線状に延びており、途中C-4グリッドにおいてはブリッジとなる部分が確認され東西に分断される形となるが、単一の遺構として扱った。断面形はU字状を呈する。調査区西側ではいくつか重複関係が認められ、SD02に切られ、SD05を切っている。本址からの出土遺物は須恵器片25点(杯8 壺1 甕16)、土師器片34点(杯3 甕30 赤彩杯1)、珠洲片2点(播鉢1 甕1)、青磁杯片1点である(図112・118・119・301・303・304)。

SD02 (第5・10図)

本址はB・C・D-2グリッドにかけて検出された南北にはしる溝である。主軸方向はほぼN-2°-Wを示し、直線状を呈している。現存長は15.2mを測るが、南北端は調査区外へとはしている。幅は76cm、深さは50cmを測る。断面形はU字状である。SD01・03・04を切っている。本址からの出土遺物は須恵器片16点(杯7 甕9)、土師器片10点(杯2 甕8)、珠洲片2点(播鉢1 甕1)である(図113・302)。

SD03 (第5・6図)

本址はC-1~3グリッドにかけて検出された東西にはしる溝である。主軸方向はほぼN-88°-Eを示し、直線状を呈している。一部調査区外にかかるが全長は19.5mを測る。幅は136cm、深さは58cmを測る。東西両端は立ち上がり、西側においては重複がみられSD02に切られている。断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物は須恵器片10点(蓋1 壺9)、土師器片29点(甕28 内黒杯1)である(図101・122)。

SD04 (第5図)

本址はD-1・2グリッドにかけて検出された東西にはしる溝である。主軸方向はほぼN-88°-Eを示し、直線状を呈している。北、東側が調査区外となるため規模は不明だが、西端は立ち上がり確認できる。現存での確認値は長さが4.2m、幅は86cmで、深さは49cmを測る。西側においては重複がみられSD02に切られている。断面形はU字状を呈すると思われる。本址からの出土遺物は須恵器片4点(杯2 甕2)、土師器甕片5点である。

SD05 (第5・10図)

本址はB・C・D-2グリッドにかけて検出された。主に南北にはしているが、東側開く弧状を呈している。南北が調査区外となるため規模は不明だが、幅は最大で127m、深さは43cmを測り、長さの現存値は15mを測る。断面形は緩やかなU字状を呈する。本址からの出土遺物は須恵器片6点(蓋1 甕5)、土師器甕片2点である(図104・216)。

SD06 (第7・11・12図)

本址はB・C-4グリッドにかけて検出された。主軸方向はほぼN-30°-Wを示すが蛇行気味である。最大幅は102cm、深さは78cmを測るが、南北は調査区外となり長さの現存値は13.8mである。北側においては重複がみられSD01に切られている。断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物は須恵器横瓶片1点である。(図121)

SD07 (第12図)

本址はB・C-1グリッドにかけて検出された。主軸方向はほぼN-16°-Eを指す直線状の溝である。最大幅は68cm、深さは10cmを測るが、南は調査区外となり長さの現存値は6.7mである。断面形は丸底形を呈する。本址からの出土遺物はない。

SD08 (第6・11図)

本址はB・C-3・4グリッドにかけて検出された。主軸方向はほぼ座標北を指す直線状の溝である。最大幅は94cm、深さは13cmを測るが、北端はSD01に切れ、南は調査区外となり長さの現存値は6.7mである。断面形は丸底形を呈する。本址からの出土遺物はない。

SD09 (第7・12図)

本址はB・C-4グリッドにかけて検出された。主軸方向はおおよそN-10°-Eを指し、平面形はやや不整形を呈する。全長は8.3m、最大幅160cm、深さは32cmを測る。断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物は須恵器杯片1点、土師器甕片1点である(図108)。

SD10 (第7・8図)

本址はD-5グリッドから検出された。主軸方向はほぼN-45°-Eを指す直線状の溝であるが、両端はそれぞれ調査区外へ伸びる。そのため最大幅は72cm、深さは45cmを測るが、長さの現存値は6.4mである。断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物はない。

4 土坑

SK01 (第5図)

本址はC-2グリッドより検出された。平面形はほぼ円形を呈し、長径約168cm、短径約158cmを測る。深さは84cmで、断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物は須恵器7点(蓋2 杯1 甕4)、土師器片46点(杯10 甕42 内黒碗2)、珠洲鉢片1点である(図103・114・203・204・205・206・209・217・305)。

SK02 (第12図)

本址はB-4グリッドより検出された。平面形は楕円形を呈し、長径約127cm、短径約112cmを測る。深さは42cmで、断面形は丸底形を呈する。本址からの出土遺物はない。

SK03 (第7図)

本址はC-5グリッドより検出された。平面形は楕円形を呈し、長径約106cm、短径約93cmを測る。深さは37cmで、断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物はない。

SK04 (第11図)

本址はB-3グリッドより検出された。平面形30円形を呈し、長径約171cm、短径約120cmを測る。深さは42cmで、断面形はU字状を呈する。本址からの出土遺物はない。

第2節 遺物

出土遺物は、試掘を含めて土師器、須恵器、陶磁器類合わせてその破片総数は432点で、調査面積を考慮しても少量であり、遺構外出土のものも含めても整理箱5箱程度であった。器種別の破片数の内訳は土師器が、杯22点、鉢1点、碗2点、甕282点で、須恵器が蓋9点、杯39点、壺13点、瓶1点、甕56点で青磁が杯片1点に珠洲の挫鉢が2点、鉢1点、甕が2点で、その他金属片1点がある。ここでは、図示できるものについて掲載した。

須恵器 (第19図 101～123)

当調査区から出土した須恵器は、器種構成という点では個体数がやや不明ではあるが、壺や甕という貯蔵具に比べ、杯や蓋といった食器類の占める割合が比較的高く、集落遺跡の傾向にある。101～105はロクロ成形の壺である。104以外はツマミの有無が判然としない。106～120は杯であり、110・112・113・120はA類、106・108・115～119はB類に属するがこれら以外は判然としない。121は横瓶の口縁部であり、外面には自然釉がみられる。122・123は壺で123は口縁部である。これらは概ね田嶋編年のIV～V期に相当すると考えられ、8世紀後半代のものから9世紀代のものと思われる。

土師器 (第19～21図 201～218)

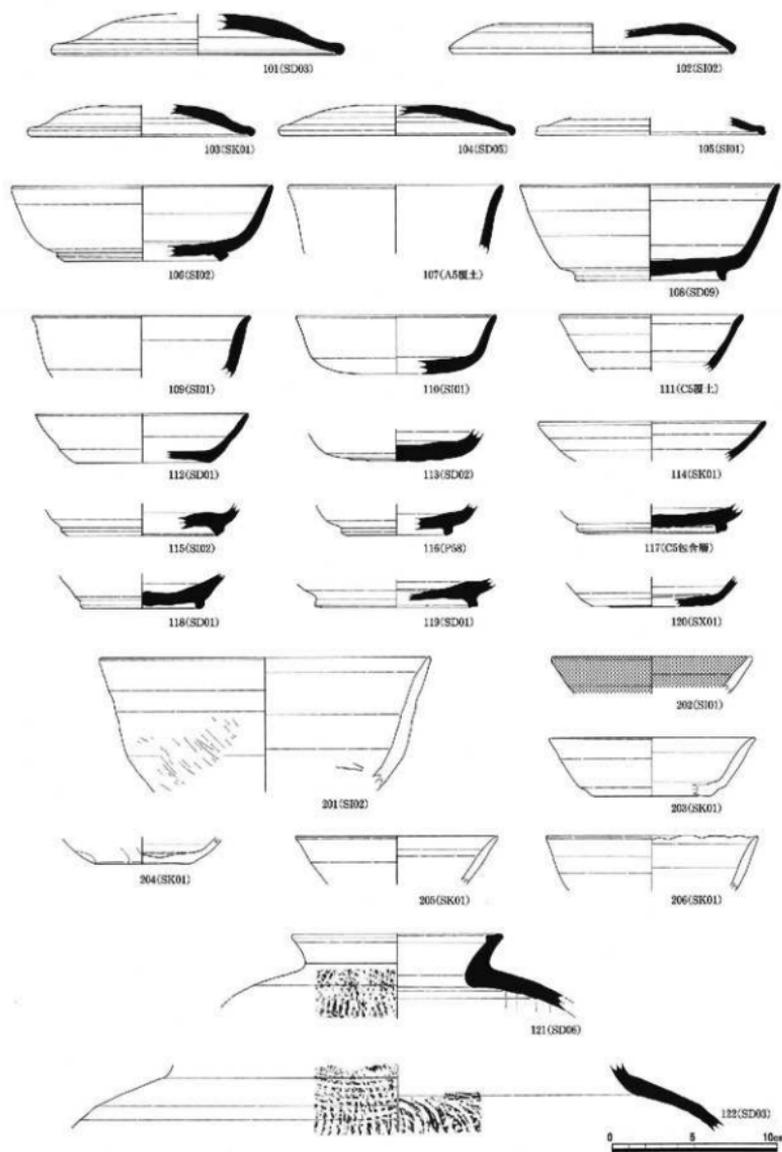
当調査区から出土した土師器については、後世における破損や磨耗により、その表面調整方法の識別などには不明な点も少なくないが、本書に図示していないものを含めても、煮炊具が占める割合が比較的高く、上述した須恵器の器種構成と同様の傾向にあるものと思われる。201は鉢である。202～206はロクロ成形の杯と思われるが、204は 体部外面に斜めのヘラ削りが施される。202は内外に赤彩が施される。207・212は銅の口縁部である。208～211・213・215・216・218は甕、214・217は壺と思われる。これらについても須恵器同様、田嶋編年のIV～V期に相当すると考えられ、概ね8世紀後半代のものから9世紀代のものと思われる。なお、207外面より採取した炭化物につき放射性炭素年代を行った(1σ640calAD-720calAD(62.7%))。

珠洲 (第21図302～305)

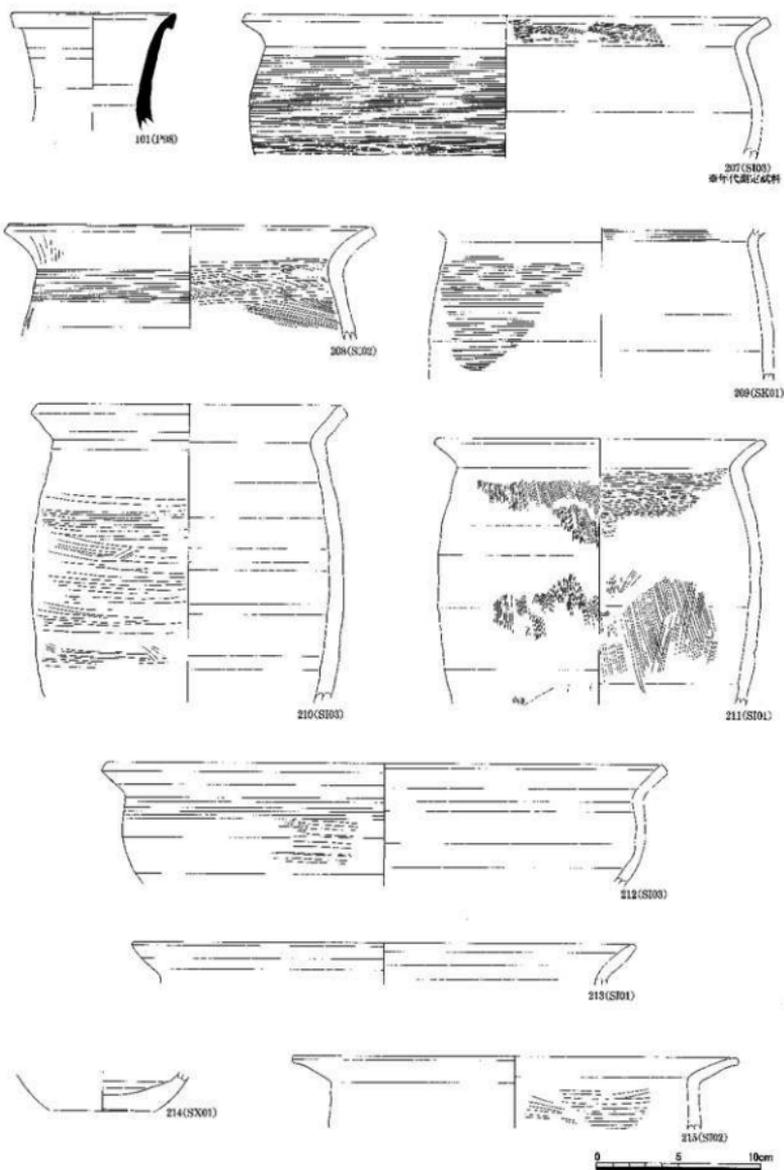
当調査区からは、すり鉢・鉢・甕といった器種で構成され5点の珠洲が出土している。これらは吉岡編年のⅡ～Ⅲ期に相当すると考えられ、年代的には概ね14世紀から15世紀の所産のものと思われる。302・304はすり鉢で描書きがみられる。303は甕である。305は鉢であろうか。

青磁 (第21図301)

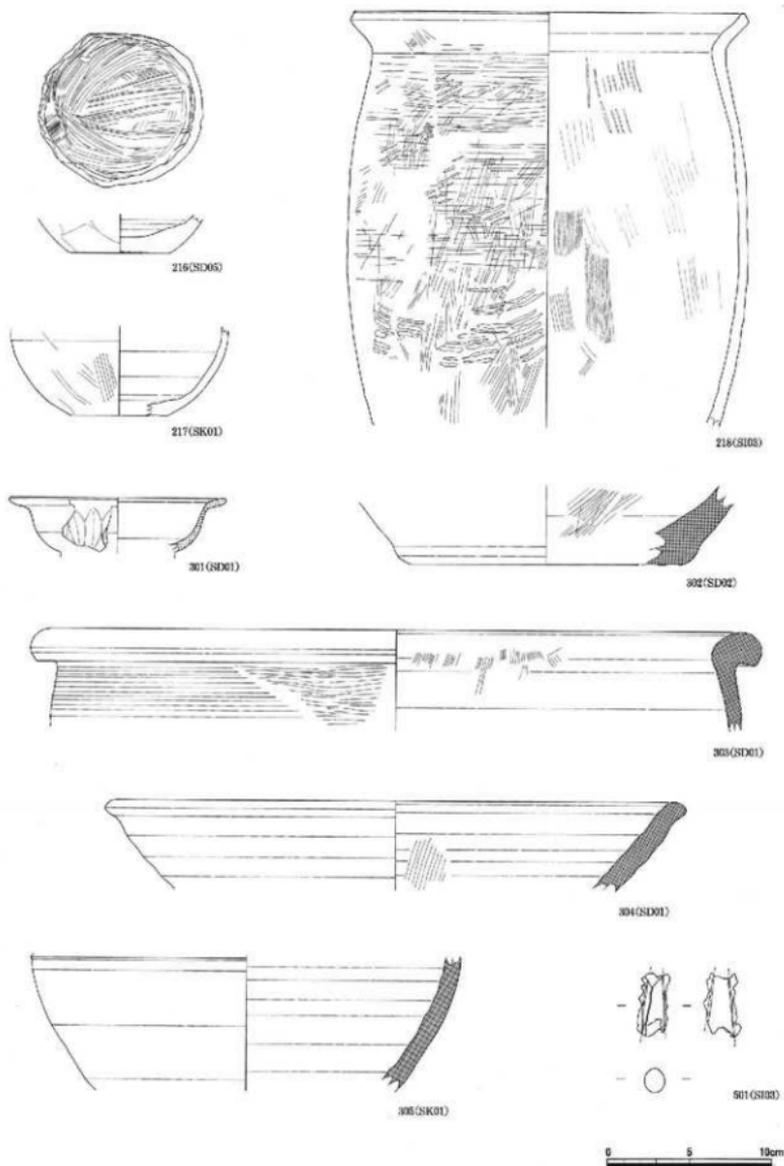
当調査区からはSD01内より1点の青磁が出土している。遺物番号301は中国龍泉窯系(中国浙江省)の製品である。器種は青磁の皿や碗に近いものである。体部外面に蓮弁の文があり、口縁部を薄く引き出している。時期は、太宰府編年の杯類Ⅲ-4類に相当することから、年代は13世紀後半から14世紀中葉と推定される。



第19図 遺物実測図



第20图 遗物实测图



第21図 遺物実測図

第IV章 自然科学分析

放射性炭素年代測定結果

本調査では、S I 03内より出土した土師器編外面に付着した炭化物について、放射性炭素による年代測定を行なった。サンプリングは太田が行った。以下にその報告をする。

年代測定結果報告書

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差(1 σ)に相当する年代で、次のように算出しています。複数回(通常は4回)の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不分散の平方根(標準偏差)と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ^{14}As : 試料炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_Sまたは($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_S

^{14}Ar : 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_Rまたは($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算します。但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ^{14}C 濃度(^{14}AN)に換算した上で計算した値です。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{AN} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{As} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{AN} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のもと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

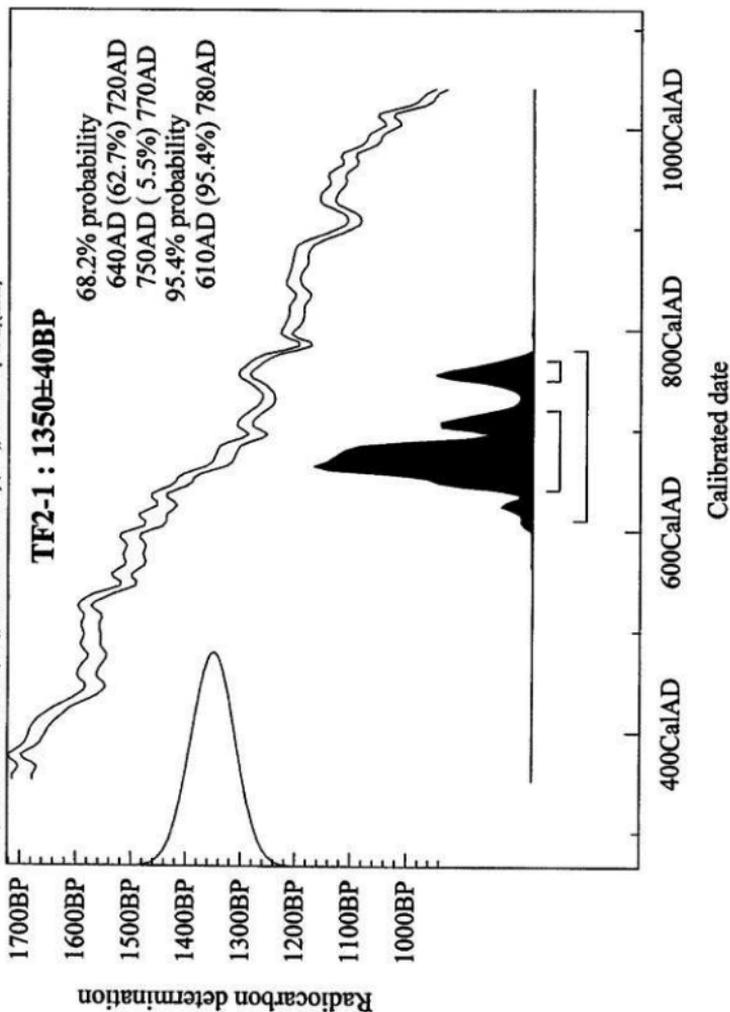
$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-31167	試料採取場所：高岡市戸出古戸出	Libby Age (yrBP) : 1,350 ± 40
	試料形態：炭化物	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -22.28 ± 0.96
	試料名(番号)：TF2-1	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -154.2 ± 3.8
		pMC (%) = 84.58 ± 0.38
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -149.5 ± 3.4
		pMC (%) = 85.05 ± 0.34
		Age (yrBP) : 1,300 ± 30

参考資料

試料番号	TF1No.1	校正結果 (1 σ)	%
試料層準	壱穴住居址SI1(竈内部土壌)	780calAD-884calAD	68.2
試料材料	炭化物		
サンプリング実施者	太田浩司	校正結果 (2 σ)	
測定方法	AMS法	692calAD-700calAD	1.3
測定機関	東濃地科学センター	716calAD-749calAD	8.1
サンプルコード	JNC-1477	765calAD-899calAD	78.6
Libby Age (yrBP)	1200 ± 40	920calAD-958calAD	7.4
校正プログラム	OxCal ver3.9		
校正曲線	INTCAL98	※ 共存遺物あり	
校正実施者	太田浩司	高岡市教育委員会(2000)「戸出古戸出遺跡概報」	

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998), OxCal v3.5 Bostak Ramsey (2000), calb r14 szi:12 prob usp[chron]



第V章 まとめ

平成15年度における、戸出古戸出遺跡の本調査時に検出された遺構や遺物について、その概要を述べてきた。以下ではこれらを総括し、今回の調査成果についてのまとめとしたい。

当遺跡は、高岡市戸出地区に所在する古代から中世にいたるまでの期間に存続した遺跡群の一角を成すものであることが判明しつつある。出土した遺物は隣接の平成11年度調査成果とほぼ同時期であった。また、検出された遺構は集落の広がりやさらに明らかにしたものである。また、今回の調査では新たに中世の区画溝と思われる遺構が確認されたことは興味深い。

遺構は、3棟の竪穴住居、3棟の掘立柱建物他多数の遺構が検出されたことは前述の通りである。まず、竪穴住居からは、それぞれわずかながらも土器の出土があり、型式等から判断しほぼ8世紀後半から9世紀前半にかけて形成された集落であることがみてとれた。竪穴住居S I 01は、東隅に竈を持つことが以前の調査で判明しており、今回北側約半分が確認されたことで、ほぼ全容が明らかとなった。竪穴住居S I 02では、南東隅に竈の一部が確認され、その構築位置には竪穴住居S I 01同様、東方向に構築するという方位上の規格性をもっていたことが考えられる。竪穴住居S I 03は、床や壁は確認されたものの竈他、柱穴、周溝等の付属施設の検出はされなかった。また、掘立柱建物址や土坑などの遺構については、覆土や出土遺物から判断してほぼ8世紀末から9世紀前半代に収まるものと思われるが、一部、溝や包含層からはわずかに中世の遺物の出土も見られた。遺構の時期差は、詳細に見ると、竪穴住居S I 03と掘立柱建物S B 01には切り合いが見られ、後者が新しいことが確認された。

また溝状遺構については、いくつか新旧関係が明らかになっている。溝状遺構S D 01・03・04は東西に直線的に延び、それらを掘削する形で南北に溝状遺構S D 02が存在している。また覆土等からみても同様のものと思われる。これらは中世に見られる区画溝的性格をもつものと思われ、帰属時期を明確に示す遺物の出土は少量であったが、その中には青磁1片の他、14世紀頃の遺物の出土があった。またこの溝状遺構S D 01に掘削される溝状遺構S D 05は少量の古代遺物の出土があり、また覆土の観察から当該時期に属する可能性がある。これらの状況を勘案すれば、東西に延びるこれら3条の溝(S D 01・03・04)は中世に属する可能性が高いと考えられることから、本調査区の北側にはこれらに伴う遺構が広がるものと思われる。また、これら以外の溝(S D 06～10)については時期や性格等については不明である。

なお、今回検出された古代の遺物を観察すると、総点数が少なく器種別での破片数の把握は可能ながら、個体数ではその構成比率などの検証はやや困難である。この状況の中であえて傾向を探るならば、日常生活と比較的近い関係にある炊煮具とされる土師器甕・鉢類が、貯蔵具とされる須恵器壺・甕類と比べて、量的には大きな差はなく、それほど変わらない器種構成にあると考えられ、また食膳具とされる土師・須恵器の杯・碗類も特筆すべき量の出土を見るに至っていない。よって、本遺跡は、在地集落であったことが窺えよう。

なお、竪穴住居S I 01からは赤彩杯、赤彩内黒杯がそれぞれ1点出土している。このことは、平成11年度調査においても指摘されているように、日常雑器とはやや性格を異にする器種であると考えられることから、S I 1(平成11年度調査)より出土した鉄鉢型土師器と合わせて、集落外からの移入品である可能性も考えられる。

さて、現状においては、本地区周辺の歴史的様相を解くには調査範囲が十分ではないため、今後の詳細な検討を重ねる必要があることは言うまでもないが、ここでは当調査において得られた資料をもとに、上記の

ような解釈にとどめた。

参考文献

- 森田勉・横田賢次郎（1981）「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 田嶋明人（1988）「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題報告編』
北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
- 古岡康暢他（1989）『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
- 高岡市教育委員会（2000）『間尽遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告5冊
- 高岡市教育委員会（2000）『戸出古戸出遺跡調査概報』高岡市埋蔵文化財調査概報第46冊
- 根津明義（2000）「(富山) 県西部における古代交通研究について」『大境』21・22合併号
- 高岡市教育委員会（2002）『中保B遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告8冊

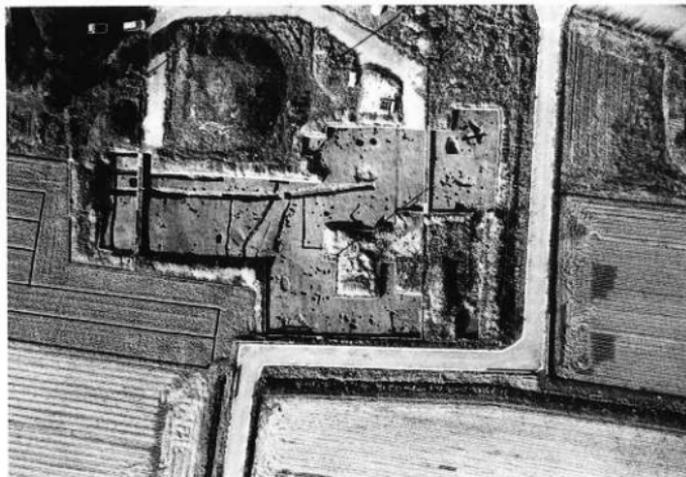
写真図版



調査前近景（東から）



重機掘削



全景垂直写真



遠景（南から）

図版 3



S101検出状況（北東から）



S101遺物出土状況（北東から）



S101完掘状況（北東から）



S102検出状況（西から）



S102遺物出土状況(西から)



S102発掘状況(西から)



S102層セクション (北から)



S103検出状況 (北西から)



S I 03遺物出土状況 (南東から)



S I 03完掘状況 (北西から)



S B01 (西から)



S B02 (西から)

図版 9



S B03 (南から)



S D01検出状況 (東から)



SD01 (東から)



SD02 (北から)

図版11



SD03 (東から)



SD05 (北から)



S D06 (北東から)



S D07 (北東から)

図版13



S D08 (北から)



S D09 (北東から)



S D01・02切り合い状況（南西から）



S D09遺物出土状況（北東から）

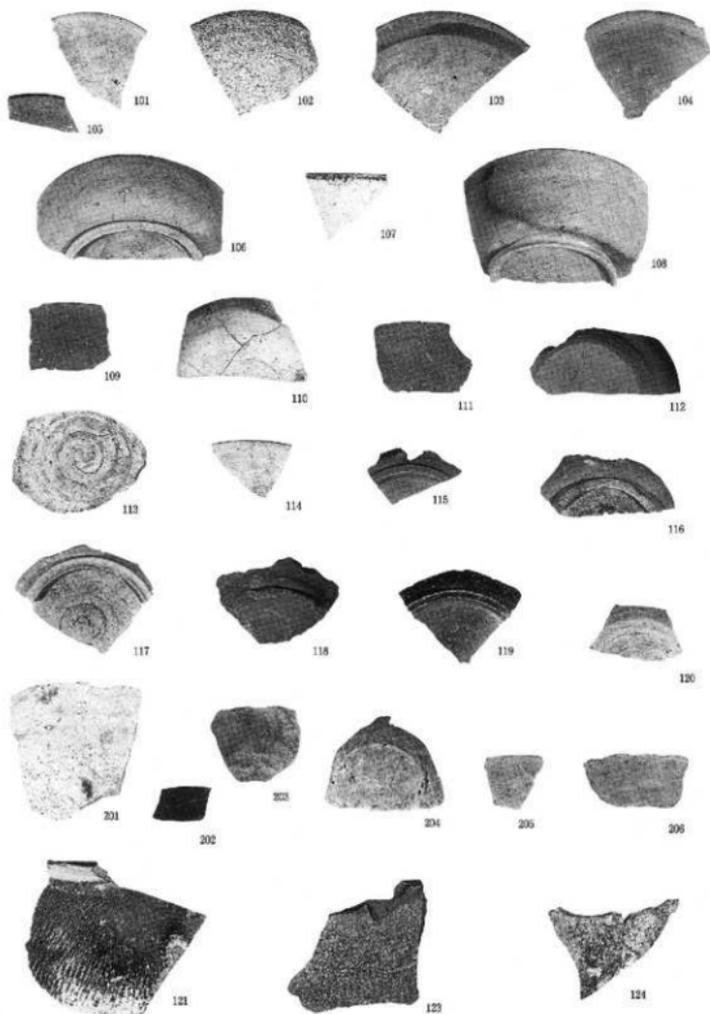
図版15



試験トレンチ (北から)

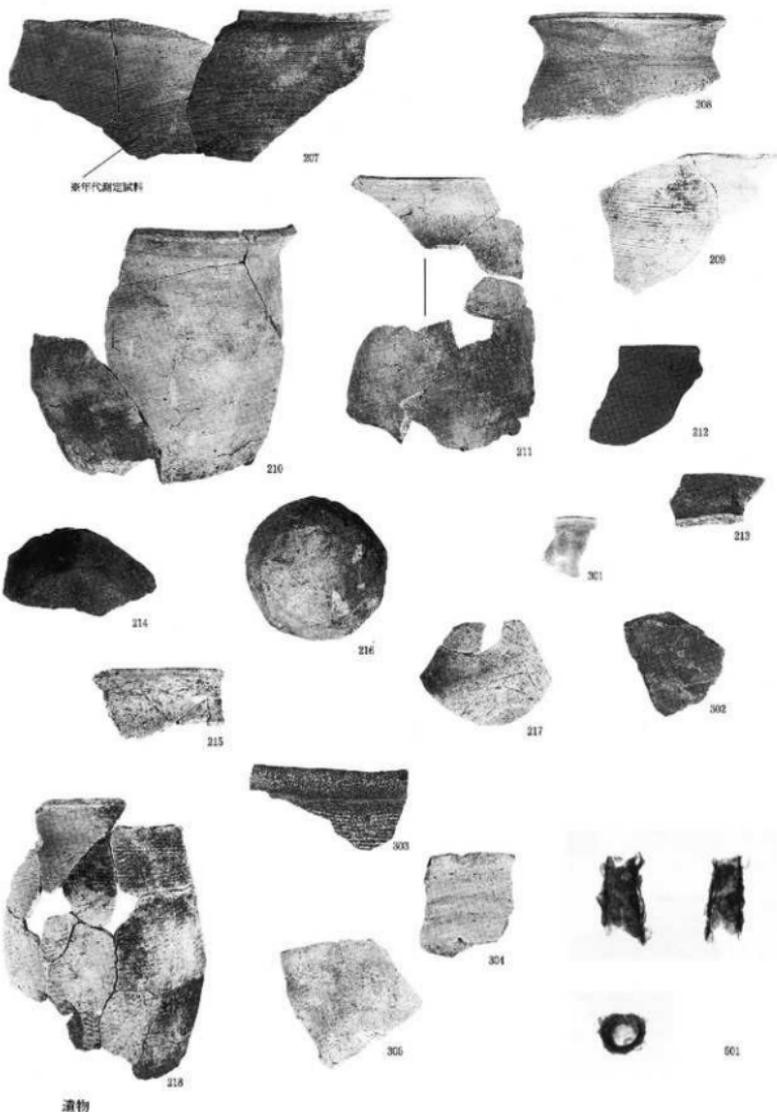


作業風景



遺物

图版17



報告書抄録

ふりがな といでふるといでいせきはつくつちょうさがいほうに								
書名		戸山古戸出遺跡発掘調査概報Ⅱ						
副書名		平成15年度宮島市営住宅建替事業に伴う発掘調査						
シリーズ名		高岡市埋蔵文化財調査概報						
シリーズ番号		第57冊						
編著者名		太田浩司・吉田寿						
発行機関		高岡市教育委員会						
所在地		〒933-8601 高岡市広小路7番50号 TEL0766-20-1463						
発行年月		西暦 2004年 3月25日						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
戸山古戸出遺跡	高岡市戸出五丁目地内	01602	202228	36度 40分 32秒	136度 58分 32秒	20030528 ～ 20031120	1,085㎡	市営住宅 建替工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
戸山古戸出遺跡	集落跡	奈良・平安時代		竪穴住居址、掘立柱建物址、溝		土師器、須恵器、珠洲、青磁ほか		

高岡市埋蔵文化調査概報第57冊

戸出古戸出遺跡発掘調査概報Ⅱ

2004年3月25日

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社チューエツ 高岡営業所

富山県高岡市京田498番地



本報告書は、環境に優しい大豆インクを使用しております。